

## 六九

### 鹿門の人々

——鹿持雅澄十哲等——

鹿持雅澄に就ては、既に其一代の名著萬葉集古義が宮内省御鑲版となり、また永言格・南京遺響萬葉集枕詞解・山齋集などの上梓されたる、或は松山秀美氏の手に成りし鹿持雅澄年譜及び土佐歌人群像・其他土佐偉人傳・土佐史談・國學者史傳、近世和歌史・國學者傳記集成・日本歌學史・大日本歌書綜覽等多數の書の掲出する所に據つて、其爲人や學殖詩藁等を諒知し得べく、著述實に六十餘種二百餘卷に上り、學者として第一級に坐することいふ迄もない。

一身の榮譽を冀はず、輕輩に終始した彼れの偉業を物語るべく、遺著の多くがよく散亂せず傳はつてゐることは、まことに珍重すべきである、故意に或は偶然に又は災禍によりて、遺著の多くが傳はらない學者に比すれば、それは幸福とせねばならぬ。更に又性情孤特にして猥に許さざるため、一人の其門下に參するものなき學者を思へば、彼れが數にも足らぬ小身を以て藩侯に識られ、其公子連枝等教學の命を蒙り、或は藩重臣の厚遇特待により、書籍閱覽の自

由を得、また藩士の學に志あるものゝ多くが、風を望んで其傘下に集合し、恰も一學府を築いた觀の有つた如きは、必しも恵まれなかつたとのみは謂ひ得ず、殊に其大著萬葉集古義が、官府の御藏版として刊行せられたることも、生前に上梓せられなかつた憾ありとは云へ、又以て贈位と併て死後の光榮となすべきである。

雅澄の門下は多士濟濟であつた。其列名を特に記述したものは未見なので、こゝに坐右の手記から拔萃して見る、勿論洩れたるも多くあらう、讀者幸に示教之が補遺に助力を仰ぎたい。

所謂鹿門十哲と稱するもの

○大崎重樹。藩士、明治十年歿、年六五。

○萬目朝風。初名弘守。藩士、別府信榮と共に訂正萬葉集二十卷を編輯す。文政十三年歿、年三七。

○南部嚴男。藩士、古義の人物傳に執筆す。

○野田千穉。秦姓初名正前。佐用の人、明治十八年歿、年七七。

○別府安宣。初名信榮。藩士、萬葉名所考の編に盡す。文久三年歿、年七三。

○松本弘蔭。土佐日記地理辨追考・日本紀歌史說等の著、古義註釋目錄の編あり。元治元年

歿、年五九。

○宮地益躬。祠官、古言徴外十三種の著述あり。文久三年歿、年六二。

○宮地常馨。祠官、品物解圖繪に執筆す、雅澄畫像の筆者なり。明治二十三年歿、年七二。

○宮地守遠。祠官、書を能くす。安政五年歿、年三七。

○横山直方。藩士、日本紀歌注等の著あり。明治五年歿、年五六。

以下門人として著はれたるもの。

○植木直枝。備中の人、枝盛の父。

○大石圓。藩士、勤皇家を以て聞ゆ。

○大江清男。盲目の歌人。

○太田満穂。祠官、萬葉集講録の著あり。

○佐々木高行。維新後侯爵を授けらる。

○武市瑞山。勤皇の巨擘。雅澄の妻きく子は瑞山の叔母なり。

○手島増魚。兼て洋學に通ず。

○寺田永保。山齋集に出づ。

○徳永千規。令義言註釋を著す。

○土居高頼。山齋集に出づ。

○原重勝。山齋集に出づ。

○廣瀬典膳。嘉永二年入門。

○福岡孝茂。藩老。萬葉集古義の稿本を藏し、維新後之を宮内省に獻す。

○松浦高之。山齋集に出づ。

○宮崎八矛。家集梅の屋集あり。

○山岡重隆。猴冠集に出づ。

○吉松萬齡。藩士、日本書紀正訓を著す。

○吉村重郷。勤皇家を以て名高し。

○渡邊順勝。今村樂家集に出づ。

○井野邊鍛水。藩士、維新後、古義出版の事に掌る。

次に正式に門人たるの記録なきも、雅澄に私淑し其の流派に屬したるもの、及びそれと推測せらるるものを擧げる。

○大久保香贄・金子宅弘・川原塚枝芳・杉本榮齋・濱田千束・細木瑞枝・宮地常坦・宮地堅  
馨・宮地嚴夫・柳井千春・吉村春峰・井野邊廣門。